

# SF アニメとジェンダー： ヒーローたちの what-if

小畑 拓也

ここ数年の「ブロックバスター」と称される大作映画のラインナップをふりかえてみてもわかることだが、「現実離れ」した設定や展開のために「逃避文学」との誹りを受けることも少なくないSF、ファンタジーが描き出すスペクタクルな世界は、こと映画、TVドラマ、演劇、マンガ、アニメなどの視覚映像分野のエンターテインメントにあっては中心的な役割を占めることも多い。1970年代にカリフォルニア州サンディエゴで発足し、世界各地で派生イベントが開催されている「コミコン (Comic-Con)」が、公式サイト (<https://www.comic-con.org/about>) で説明されているように「コミック」の名を冠しながら当初から視覚映像分野のエンターテインメント全般を関心の対象としていたのは、SF的ヴィジョンと視覚映像文化の親和性を示す例だともいえる。

SFのサイエンスフィクション (science fiction) としての側面を支えているのは、外挿法 (extrapolation) である。蓋然性 (これまでの経緯からこれから先に起こりうるであろうこと) を「常識」に沿った形で推定する思考法である外挿法は、SFという虚構に読者にとっての「現実感」・説得力を与えるものだ。SFが「リアリズム (realism)」や「自然主義 (naturalism)」と交差するのはこの点である。一方、思弁小説 (speculative fiction) としてのSFは、現実では起こりえないと考えられていることを強烈な存在感を伴ったヴィジョンとして提示してみせるところにこそ力を発揮する媒体となっている。「常識」から逸脱・分岐する“what if?” (もしこんなことが起こったら? = 実際にはあり得ないようなことが起こったら?) という仮定は、そうした想像力の極北を目指すきっかけであり、指針でもあるのだ (“Pandora’s Box” [Heinlein 2015 所収] 参照)。

「マーベル・スタジオが贈る初のアニメーション作品」という惹句が掲げられたシリーズ『ホワット・イフ…? (*What If…?*)』(2021-)の最初のエピソードが「もしも…キャプテン・カーターがファースト・アベンジャーだったら? (“What If… Captain Carter Were the First Avenger?”)」だったのは、SFアニメを含む現代の視覚映像文化におけるジェンダー認識の一端を象徴的に示すものだと見える。

ここに登場するキャプテン・カーターことペギー・カーターはもともと、『アベンジャーズ』シリーズをハブとして展開するMCU (マーベル・シネマティック・ユニバース *Marvel Cinematic Universe* [マーベル・コミックを基にした映像化プロジェクト])の原点的なヒーローであるキャプテン・アメリカ＝スティーブ・ロジャースのパートナーとなる、いうなれば「ヒロイン」に位置づけられるキャラクターであった。映画『キャプテン・アメリカ/ザ・ファースト・アベンジャー (*Captain America: The First Avenger*)』(2011)のなかでは、訓練教官であるペギー・カーターが見守るなか、スティーブ・ロジャースを被験者とした「スーパーソルジャー計画」が実行され、キャプテン・アメリカが誕生する。「もしも…キャプテン・カーターがファースト・アベンジャーだったら?」では、スティーブを対象とした計画が妨害され、頓挫しかけたとき、とっさの判断でペギーが身代わりとして身体改造を受け、スーパーソルジャーとなった。第二次世界大戦時、虚弱な体質ゆえに軍への入隊を却下されていたスティーブが、「超人血清 (*super soldier serum*)」を投与されることでスーパーヒーローに生まれ変わるという、一見マッチョな願望充足を前景化したプロットを、『ホワット・イフ…?』シリーズはその第1話ではっきりと覆してみせたのだ。

ペギー・カーターがキャプテン・アメリカならぬキャプテン・カーターになることで、キャプテン・アメリカが活躍する『キャプテン・アメリカ/ザ・ファースト・アベンジャー』の時間線は実現しなくなるが、スティーブ・ロジャースが物語世界から退場するわけではない。「アイアンマン」トニー・スタークの父、ハワード・スタークが開発したパワードスーツを駆り、キャプテン・カーターをサポートしてナチス・ドイツを陰から操るヒドラとの戦いに臨むことになる。「もしも…キャプテン・カーターがファースト・アベンジャーだったら?」の結末は、『キャプテン・アメリカ/ザ・ファースト・

アベンジャー』のペギーとスティーブがお互いの立場を交換したような展開になっている。自己犠牲によって一時的に舞台を去るヒーロー（男性）と、その帰りを待つサポート役（女性）という構図の、男性と女性の位置が「逆転」しているのだ。

MCUの世界で傑出した人物として描かれるペギー・カーターではあるが、『キャプテン・アメリカ／ザ・ファースト・アベンジャー』やその後（第二次世界大戦後の時代）を描いたTVシリーズ『エージェント・カーター (*Agent Carter*)』(2015-16)において（「もしも…キャプテン・カーターがファースト・アベンジャーだったら？」のなかでさえも）、男性中心で構成された組織のなかで主導的な役割を割り振られず、サポート役に徹するように求められ続けるという抑圧が表現されている。1940年代から50年代という時代設定に照らせば、そうした抑圧が社会的に解消されていなかったのは事実だが、そのような社会構造の裏をかくような形で男性に限定されないヒーロー像を提示しているところは、MCUがあくまでも現代の物語を紡いでいるからだといえる。しかし一方で、そこで問い直され、描き直されているのは、あくまでも女性と男性が男性主導のもとに対となってハッピーエンディングを迎えるような、「女性／男性」というバイナリーなジェンダー属性や異性愛を前提としたセクシュアリティを軸とした関係性であった。

「女性／男性」による「分業」を支えているバイナリーな境界が薄れて見えるような状況が演出されることと、それがあくまでも演出されているだけで境界・障壁が解消されているわけではないことが、ジェンダーをめぐる物語を読み解くことで見えてくることがある。「非常時」の「総動員」、つまり従軍や戦争協力の場面では、「平時」に超えられない境界・障壁が（不完全な形ではあれ）取り払われているかのように広報・宣伝が行われることがある（斉藤美奈子『モダンガール論』第三章「夢と現実のはざま」内「ああ、すばらしき軍国婦人」の項参照）。第二次世界大戦時にドイツが使用していた暗号機エニグマによる暗号の解読を成功させた機関に所属していた、数学者アラン・チューリングの伝記をもとにした映画『イミテーションゲーム／エニグマと天才数学者の秘密 (*The Imitation Game*)』(2014)には、戦時におけるジェンダー、セクシュアリティを問わない動員と、そのなかでも解消されていなかった性差別、セクシュアリティとジェンダーをめぐる抑圧が複

雑に絡み合う形で描き込まれていた。チューリングが暗号解読に従事していた機関に同時期に所属していた女性たちの戦後の「活躍」を描いた英国のドラマシリーズ『ブレッチリー・サークル (The Bletchley Circle)』(2012-14)では、「非常時」に与えられていた権限が「平時」となるとあっけなく剥奪され、身近に迫っている脅威に対抗するための「探偵」活動に苦闘する女性キャラクターたちの姿が印象的であった。

「非常時」に「動員」される「強い」女性キャラクターを前景化してみせ、「女性への抑圧が解消されている世界」が描かれているように錯覚させる演出は日本のアニメでも行われてきたことである。『宇宙戦艦ヤマト』(1974-75)での極端な女性と男性の主要キャラクター配置の偏りを「是正」する形で、リブート版である『宇宙戦艦ヤマト 2199』(2013)では主要キャラクターの女性／男性比率はある程度見直されていたようだが、介助者・看護者的な性格付けや「巫女・霊媒」的な能力の付与が女性に偏っている点などがみられ、残念ながらジェンダーバイアスに基づくと思われる「役割」の割り振りが解消されていたとはいいがたい。『宇宙戦艦ヤマト』の5年後に制作された『機動戦士ガンダム』(1979-80)に示されるジェンダー観が旧態依然としているのは時代の制約だといえなくもないが、『新世紀エヴァンゲリオン』(1995-96)において、その懐古的な世界観ゆえか、キャラクターの関係性において女性と男性の「差異・断絶」を強調しているように見え、またそれが(そのためなのか、それにもかかわらずなのかは判然としないものの)かなりの人気を博していたこと(そして「新劇場版」の完結まで日本のアニメ文化を牽引する力を持っていたこと)を考えると、ジェンダーをめぐる問題意識が広く共有されるに至っていなかったことを思い知らされる。他方、日本の事例でも、OVA『機動警察パトレイバー』(1988-89)を出発点とする『機動警察パトレイバー』シリーズ、なかでもゆうきまさみによるマンガ版(1988-94)では、「平時」に「活躍」をもとめられる女性の警察官たちを、ジェンダーロールのバリエーションとしてではなく、個々のキャラクターとして掘り下げて描いていた。

ディズニー映画『ズートピア (Zootopia)』(2016)の主要キャラクターの一人ジュディの警察官としての出発点は、政治家による政策アピールの一環、つまり個人の能力を評価されたというよりも「初のウサギ警官」であるとい

う属性を代表する象徴としての役割を求められたところにあった。個人レベルでの希望と挫折、ジェンダー属性と種族の属性が複雑に交差する物語世界を「ただそうだからしかたがない」と許容するのではなく、「よりよい場所にする」という志向とその実現可能性の提示によって動かしてゆこうとする意思を、ヒーローにもヴィランにも分かち合わせながら、個々のキャラクターの背景・性格付けによって分岐・合流させるところにまで踏み込んでいたのが（種族間の棲み分けなどが旧来の寓話に沿う形で示されるという「わかりやすさ」に寄せたための限界があるにせよ）同時代の問題に批評的に切り込もうとする『ズートピア』という物語の性質を示している。

マーベル・コミックを忠実になぞるわけではない映像化として派生してきていることもあり、はじめから分岐によるマルチバース要素を胚胎していたMCU（とそれに連動するマーベル・コミックの世界）は、おとぎ話的な「男性＝ヒーロー／女性＝ヒロイン」という硬直したジェンダーロール／ジェンダーバイアスにとどまらず、様々な属性を分断・抑圧する差別的な構造・意識への異議申し立てとなりうるヒーローたちを次々に登場させてきている。2019年に公開された映画『キャプテン・マーベル (Captain Marvel)』と2022年に配信されたドラマ『ミズ・マーベル (Ms. Marvel)』は、その一端を担うものである。マーベル・コミックの世界で、かつて男性ヒーローであったキャプテン・マーベルの女性版として生み出された女性ヒーロー「ミズ・マーベル」ことキャロル・ダンバースがキャプテン・マーベルの名前を受け継ぐことになり、女性ヒーロー、キャプテン・マーベルが誕生した（キャプテン・アメリカとキャプテン・カーターが入れ替わったのと部分的に重なる構図でもある）。映画『キャプテン・マーベル』は女性ヒーローとなったキャラクター像を前提として制作されている。MCU版キャプテン・マーベルのヒーロー像を決定づけるのは、キャロル・ダンバースの戦闘訓練のかつての指導者である男性ヴィランが、素手での戦いで自分を倒しておまえの力を示してみせろと挑発するのに対し、肉弾戦ではなくスーパーパワーで圧倒したのちに言い放つ「証明なんて必要ない（“I have nothing to prove to you.”）」という台詞である。マッチョな「正々堂々」とした「戦い」という幻想に巻き込まれない、しかしながら圧倒的な力の差を示す女性ヒーローの姿は、一つのロールモデルとなりうるものであった。ドラマ『ミズ・マーベル』の主

人公カマラ・カーンは、パキスタンにルーツを持つ（つまり非ヨーロッパ系の）アメリカの高校生で、(MCU 世界の住人であるため)「実在の」キャロル・ダンバース＝キャプテン・マーベルに強い憧れを抱いている。曾祖母から受け継いだ神秘的な力を秘めた腕輪を身につけ、スーパーパワーを発揮するようになったカマラは、驚異的な体験を重ねるうちにマジョリティではない自分自身の属性・あり方を肯定的に捉えられるようになった末に、キャプテン・マーベルにあやかり、ミズ・マーベルを名乗ることになる。

最後にバイナリーなジェンダーをベースにした異性愛志向や、種族なども含めた属性の多様性を当然のように提示・混淆させ、個が取り結ぶ関係性の尊重を物語で強調しようとする試みを明確に打ち出す、SF・ファンタジーのアニメやドラマの例に触れておきたい。カートゥーン・ネットワーク制作の『アドベンチャー・タイム』(2010-18)は、ポストアポカリプスの、ファンタジーのような生物・事物があふれかえる「ウー大陸 (the Land of Ooo)」で「ヒーロー」を目指す、人類の生き残りである少年フィン (Finn) を中心に繰り広げられる「冒険」物語が基調となっている。「ウー大陸」で人型に近い姿をしている存在の大半は、魔物やミュータントであり、ジェンダーや再生産のあり方も、視聴者側の世界のマジョリティが押しつけようとしている「規範」とは全く違ったものになっている。同じくカートゥーン・ネットワーク制作の『スティーブン・ユニバース』(2013-19)は視聴者にとって同時代に近くみえる（しかし、かつてエイリアンの侵略によって作り変えられかけたためにパラレルワールド化している）地球が主な舞台だが、エイリアンとの共存によって生じる多様性のみならず、人類の中にもともとある多様性・個性を尊重し、狭量な規範意識に基づいた抑圧を排しようとする意思を基調とした物語が展開されるシリーズになっている。1966年にスタートした『スタートレック』シリーズの一部である『スター・トレック：ディスカバリー』(2017-)は、シリーズの例に漏れず、様々な種族の葛藤・共存を描いているばかりではなく、「主人公」役にアフリカ系の女性を配置し、バイナリーな形では捉えきれないジェンダー・セクシュアリティの役割に当事者性をもった演者を起用していることなども含めて視聴者側の現実と連動するものとして示そうとしている。“What if?” から始まる SF (speculative fiction) 的表現は、逃避的な「奇想」というわけではなく、もともと人間が個々

に持っている属性に焦点を当て直すためのきっかけに過ぎないのである。

## 参考資料

### アニメ・映画・ドラマ（年代順）

『宇宙戦艦ヤマト』(1974-75)

『機動戦士ガンダム』(1979-80)

『機動警察パトレイバー』(1988-89)

『新世紀エヴァンゲリオン』(1995-96)

『機動警察パトレイバー』(1988-89)

『アドベンチャー・タイム』(2010-18)

『キャプテン・アメリカ / ザ・ファースト・アベンジャー』(2011)

『ブレッチリー・サークル』(2012-14)

『スティーブン・ユニバース』(2013-19)

『イミテーション・ゲーム / エニグマと天才数学者の秘密』(2014)

『エージェント・カーター』(2015-16)

『ズートピア』(2016)

『スター・トレック：ディスカバリー』(2017- )

『キャプテン・マーベル』(2019)

『ホワット・イフ…?』第1話「もしも…キャプテン・カーターがファースト・アベンジャーだったら？」(2021)

『ミズ・マーベル』(2022)

### 書籍（著者 50 音・アルファベット順）

アニメの旅人（安東丸雄・伊藤裕子・岩崎真実・大木不二・大坪優太・神田法子）『すべてがわかる！ 日本アニメ史入門』（彩流社、2021年 [Kindle版 2022年]）

小山昌宏、須川亜紀子（編著）『アニメ研究入門 [増補改訂版]』（現代書館、2014年 [Kindle版 2020年]）

—『アニメ研究入門 [応用編] —アニメを極める 11のコツ』（現代書館、2018年 [Kindle版 2020年]）

- 斎藤美奈子『モダンガール論——欲望史観で読む女子の二〇世紀』（筑摩書房 [Kindle 版]、2023 年）
- 須川亜紀子『2.5 次元文化論 舞台・キャラクター・ファンダム』（青弓社、2021 年 Kindle 版）
- 須川亜紀子、米村みゆき（編著）『アニメーション文化 55 のキーワード（世界文化シリーズ〈別巻〉3）』（ミネルヴァ書房、2019 年）
- 津堅信之『日本アニメ史—手塚治虫、宮崎駿、庵野秀明、新海誠らの 100 年』（中公新書、2022 年 Kindle 版）
- ゆうきまさみ『機動警察パトレイバー』1～22（小学館、1988-94 年）
- 若桑みどり『お姫様とジェンダー—アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門—』（ちくま新書、2003 年 [Kindle 版 2014 年]）
- Heinlein, Robert A.. *Robert Heinlein's Expanded Universe: Volume Two* (Phoenix Pick、2015 年 Kindle 版)

—こばた・たくや 日本文学科准教授—